
おわりに

事業年報の「おわりに」の原稿を、その年度の当事業団の調査研究、健康診断活動、疾病予防の活動、診療活動の原稿を読んでから書いていたところ。新型コロナ感染は史上最高の感染者の第七波になり、当事業団でも新型コロナ感染症の猛威を逃れることが出来なかった。

2021年も、あらゆる領域で感染症の影響を受けた。新型コロナ感染症は学校の授業を対面からオンライン授業、学会も会場でなくWeb開催、仕事も会社勤務と共に自宅でのリモートワークの比重が大きくなった。

新型コロナ感染症下でも、健康診断や診療は対面で行われるべきものであり、当事業団の診療体制や健診体制を従来通り対面を維持した。一方、対面でなくとも運営可能なものは昨年と同様にWeb開催とした。当事業団は、健康の啓発事業としての健康セミナーや健康講座を行っており、昨年からYouTubeを使い講演内容を配信し好評を博している。ただ、Webによる講演会は、講師から聴講者へ伝達が一方になり、講演中の質問や、日ごろ疑問に思っていたことを講師に聞くことが出来ない。この点で一工夫をし、Web配信でも対面と遜色ない講演会にしたい。テレワークによる在宅勤務は新型コロナ感染症が収まっても定着していくようである。講演会もWeb講演が定着してゆく可能性がある。

生活習慣病の疾病の病因・診断・治療および予防に関する調査研究のための健診ならびに診療事業は対面で行っている。健診者、診療者人数は昨年より増加したものの、新型コロナ感染症前には戻らない。新型コロナ感染症がまだ収束してない状態が今年も続いているからだろう。元に戻すための工夫が求められるが、2022年には電子カルテが導入されるので、その活用が期待される。また、対面で行っている診療をオンライン診療に一部変換することも考えていかなければならない。

当事業団の医師、医療従事者による学会発表、外部講演会、発表した論文について調べたところ、外部施設との共同研究による英文論文は多かったものの、日本の学会活動が制限されているためか、学会発表は少なかった。

今年度も全部門が、研究課題を設定し研究を行った。それぞれの研究は素晴らしいが、新型コロナ感染症の為、発表がイントラネットになってしまい、活発の討議がなされなかったのが残念である。

三越医学医学研究助成並びに三越海外留学渡航費助成の応募者はほぼ昨年と同じであった。日本の科学研究は質量とも低下している中で、医学研究がまだ踏ん張っているのが、救いである。望むらくは受賞者から世界を席巻する研究がなされるのを期待したい。

健診、診療にとって診断機器の新規採用、更新は診断精度を上げるために重要である。健診で新規で行った経腔エコーは、子宮筋腫の診断に役立っている。検査希望者が多い。また、エコーの機械も更新し、心臓の診断精度を上げている。

次年度は長年の懸案だった電子カルテの導入も決まり、健診と診療の受診者番号が共通化される。両部門が一体化されることにより、健診者、診療受診者の利便性が高まることを期待したい。

(水野杏一 記)

公益財団法人

三越厚生事業団

MITSUKOSHI HEALTH
AND WELFARE FOUNDATION